

「マインド・アップローディング (Mind uploading) 」について考えるために

「アップロード」という言葉は今や多くの人が耳慣れています。あらためて考えてみると何のことでしょうか？ それは、何らかのローカルな場所（たとえばこのスマホやパソコン）の中にある情報を、不特定のユーザが利用できる場所（たとえばインターネット）に転送することを意味しています。そこからすると「マインド・アップローディング」とは、「この私の身体」といういわば「ローカルな場所」にある「心」を情報として取り出し、それを何らかの機械（たとえば人工知能が搭載されたロボット）に転送することを意味しています。そんなことが可能かどうかはともかく、そのことによっても何が変わるのでしょうか？

私のスマホ内にしかない情報は私しか見ることができないし、スマホが壊れたら消滅してしまいますが、ネットにアップロードしておけばバックアップが取れるし、他の人と共有することもできます。それと同じように、私の心は私にしかアクセスできないし、私が死ねば消滅してしまいますが、もしもそれをどこかにアップロードできるなら、私の心を他の人々が共有することもできるし、複製や編集をすることもできる、そしてアップロードされた私の心は私の身体がなくなっても存続する（つまり「不死」になる）ということになります。

SFとしては面白いアイデアですが、現実的に即して考えると、この「マインド・アップローディング」という考えはいくつかの（私からみるとかなり無理な）前提の上に成り立っています。

まず、

① 私の心は私の身体という「ローカルな場所」にある、という前提です。たしかに心と身体とは密接な関係にあり、気分や考え方は身体の状態に大きく影響されます。しかし、私たちの身体とは、私たちが持っているスマホやパソコンと同じ意味で「ローカルな場所」ではありません。「ローカルな場所」という言い方は実は冗長な表現で、「ローカル」とは「場所を持つ」ということです。たとえば心はあたかも身体の特定の場所（腹、胸、頭？）の「中に」あるかのような感覚を私たちは持ちますが、そのことが、情報がスマホの記憶装置の「中に」電気信号として格納されていることと同じかどうかは分かりません。

次に、

② 「心を情報として取り出す」ことができるためには、心は情報でなければなりません。たしかに今では、心の特定の状態——たとえば喜びや不安、怒りなどの感情——が、脳神経の電気的興奮が示す特定のパターンと対応していることは分かっています。しかしこのことは、心と情報とが関係していることを示唆するだけであり、「心とは情報である」という形而上学的命題を証明するものではありません。「心が脳内の情報処理によって生み出される」というような観念は、30年前なら一部のSFファンや哲学者だけが空想していたことであり、多くの人にとっては現実感がありませんでした。それが今のように現実感を伴うようになったのは、単に私たちが朝から晩まで情報機器に触れているという生活環境の変化によるものです。

さらに、

③ それでも無理やり心を情報として取り出そうとすると、身体の全ての振る舞いの中でコンピュータにいちばん似ているように見える側面に注目せざるをえません。それは神経活動であり、それが集中している脳の挙動です。つまり「マインド・アップローディング」とは、脳を完全にスキャンすることによって心を情報として取り出せる、という前提に基づいています。しかし、脳は全身に埋め込まれており、さらに身体はそれを取り囲む環境に埋め込まれています。心はそ

うした複雑な内包関係全体から創発する出来事であり、脳だけを特別視することは恣意的であると私は考えます。

このように「マインド・アップローディング」は哲学的には真剣に議論するに足るテーマとはとても言えない、というのが私の考えです。けれどもそれとは別に、この観念は現代ではとても影響力を持っているので、なぜ多くの人々がこうした考えに惹きつけられてしまうのか、という問題は考えてみる価値があります。そのためには、最新テクノロジーを見ているだけでは不十分で、時間を二千年以上遡って、西洋形而上学のそもそもの始まりにおいて「肉体と魂との関係」「心身二元論」「心身問題」といった枠組みがどのように作られ広がっていったかを辿ってみることが参考になります。そして「魂の不死」というプラトン哲学のテーマが、それとは似ても似つかないように思える「情報として永遠に生きる私の心」という一見最先端っぽいイメージに忍び込んでいることを考察したいと思います。

現代科学は哲学的には物理主義（physicalism）です。もちろん心理学や動物行動学のように「心」という概念を用いる科学もありますが、その場合でも「心」は説明のための概念であって究極的な実在ではありません。実在するのは物理学の対象となる物質的なもの、あるいはそれを可能にしている原子、素粒子、波動、etc.です（量子論の現代的解釈の中には、実在はモノですらなく観測可能な情報であるという立場もあります）。だから現代科学に決定的な影響を受けている私たちの「常識」も、突き詰めると結局は——そんなもん聞いたことがないという人にとっても——「物理主義」に行き着くのです。

ちょっとニュアンスは違うが、物理主義はまあ唯物論だと理解しても間違いではないでしょう。ところで、プラトンはもちろん唯物論ではなく観念論です。ところが、物理主義／唯物論に基づく現代科学技術の最先端である情報技術が、プラトンの観念論と同じような魂の不死性という考えを支持しているように見えるのは、とても面白いことだと思います。

物理主義から見ると、意識や心やクオリアのような主観的体験がなぜ存在するのかは謎に見え、「ハード・プロブレム」と呼ばれたりします。私は物理主義に立脚しないので、私にとって意識や心の存在は「プロブレム」ではありませんが、物理主義に立脚する哲学者はとても多く有力なので、彼らと話すときには「ハード・プロブレム」という考え方に付き合っただけあげることもあります。英語しか理解できない人たちと話す時には、不便でも英語で話してあげるしかありません。これは単なる力関係の問題です。物理主義に立脚すれば心の存在が「プロブレム」に見えることは私も否定しません。だがこのことは、物理主義／英語以外の世界把握が不可能であるとか、他の世界理解／言語による認識内容が最終的には物理主義／英語に翻訳可能であるということをもまったく含意しません。

作家の多和田葉子さんは『カタコトのうわごと』という本で、言葉というものは穴だらけで、どうしてこんな穴あきチーズを使ってもものを書いたりできるのだろう、と述べています。言葉が穴あきチーズだと分かるのは、多和田さんにとってのドイツ語と日本語のように、ふたつの言葉がある程度行き来して初めて見えてくる景色なのです。物理主義も穴あきチーズですが、それは物理主義の内部にいる限りは見えません。意識や心の問題は物理主義の穴の中にあるから「プロブレム」に見えるだけです。物理主義の内部にいる人は、科学に穴があるというならそのエビデンスを示せと言いますが、そんな要求に応える必要はありません。無理に答えたらオカルトになるだけです。